

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

面との出会い。

幼なかつた頃の思い出である。青山の家はささやかな二階家だった。上が父の仕事場、樹々に囲まれた階下に母かの子の居間があった。一日中、障子をしめきりのうす暗い座敷で、黙々と机に向つてものを書いていた母。若く、ひどい苦悩に動揺していた時代だった。やせた真青な顔。大きな眼で狂つたように前方を見すえ、黒髪をバサツと背にたらし、異様な気配だった。

ほとんど動かない背中。振向きもしない。あやされたり、にっこりとほほ笑みかけてくれたという記憶はない。まったく無視されていたようだ。親なし子のように、私は一日、外で遊んだ。

真昼の陽のなかで孤独な幼児の心に、ふと閉ざされた部屋の、透明な母の影が、傷口のようにズレて浮んでくる。あの黒髪をとおした母の横顔。……それは蒼白い面であつた。

A 夕方、遊び疲れるころ、忽然と恐怖的な事態が身に押し寄せてくる。うす暗くなつた横丁から真赤な鼻をテラテラさせた天狗がとび出して来て、私に襲いかかる。その後ろから何人かの子が揃つて大声をあげ、私を追つけてくるのだ。それは通り二つほど隔てた向うの、私より五つ六つ大きい子供たちだ。まったく不思議だった。同じ町のなかでも道筋がちがい、まして年齢がそのくらい離れると一緒に遊ぶことはないし、ふだんは全然つきあわない子供たちなのだ。それが夕刻になると、真赤な天狗の面をかぶつて私に迫ってくるのだ。不思議な執拗さで。他の子もいるのに、いつも私だけをねらつて襲ってくる。

天狗なんて決して信じていなかったし、それに、面自体、幼い私の眼にも型どおりの、俗悪な天狗だった。そしてかぶっているのがこの子であるかも、ちゃんと分っている。

ただ真赤に飛び出した鼻が、毎夕、遮二無二襲つてくるとき、何か、人間集団の意地悪さ、酷薄さ。地層が崩れてくるような圧迫感で、じわじわと身に迫る。どろんと淀んだ夕闇のなかの、ゆがんだ世界の重み。それに私はおびえたのだ。

あのうす暗い室内の、真青な面。そして激しい叫び声をあげて追ってくる真赤な天狗の面。それが人生で最初の面との出会い

だった。B。二つはまったく異質であり、世界が違っていた。真赤な面に襲われた私は家の中に駆け込む。恐怖で身体からだじゅうが引きつっている。しかしその恐怖感、事件を、母に、「蒼白そうはくの面」に話して何になるのだ。幼な心にそう直感した。私は訴えなかった。だから母は私が夕刻、ふるえながら家に駆け込んでくる意味がわからなかった。あの残酷な体験を私はただ一人で耐えなければならなかった。

人生の出発点に呪文じゅもんのように浮んでくるこの二つの面。今でも強力に何か運命的な響きを伝えているようだ。私の孤独感、燃える戦闘心は、あるとき総身に焼きつけられた、そんな気がする。

いまふりかえてみると、あれは確かに一つのイニシエーション（若者の入門儀礼）ではなかったかと思うのだ。

面とイニシエーション、世界観の確立。私はここでその問題にふれてみたい。あの不思議な仕組み、組合せは、まったく偶然の儀式だったと言えるかもしれない。ひどく飛躍した設定だと思われるだろうか。われわれの周囲でそんな儀式の慣習は大昔に失われてしまっているし、あの子たちにそんな意識があったはずはない。だが――。

現代はまことに「イニシエーション」を失った時代である。かつては一人前の人間になるための関門として、また人間であることの矛盾を克服する手段として、この儀式が行われていた。それはまた同時に、母親との訣別けつべつを意味している。それまでは保護された幼児であった存在が一度死んで、一人前の男として、責任ある存在として、また部族の勇氣ある闘士として生れかわるのだ。

その儀式は社会により、時代によって実にさまざま、無限な形式、彩りいろどがある。

まず日常の生活空間から追い出され、母親の手から隔離される。若者たちはその間、あらゆる苦痛に耐えなければならない。彼らはシステムとして、習俗として、死ぬ思いのきつい儀式、さまざまの神秘的な試練のなかに追い込まれる。深い森をさまよひ、水の中に投げ込まれ、打ちのめされ、傷つけられ、その傷口に汁や泥をすり込み、ふくれあがらせて身体の飾りにさえする。その傷口は男の誇りとして、生涯残る。それはイレズミである。また永い間飢えに耐えなければならなかったり、そして突然、奇怪な面をかぶった神、鬼、超越者の前に引きずり出されるのだ。

儀礼を受ける若者たちが暗い中で戦慄的に面に出会すというのは極めて数多い例である。夕闇のなか、あるいは赤々と燃える炎に照らし出された深夜の暗黒から、面は浮びあがり、若者に迫る。

人間は自然の中からただ生れ出てきたものではない。「人間」は作られるものだ。人間自身によって。だからまた人間の手で壊されなければ、宇宙に還元されなければならない。それが儀礼なのだ。

若者たちはこの試練を終ったのちに、一人前の「男」として、新しい精神力と誇りをもって大人の社会に参加するのだ。人間生命の神秘、その伝統は彼らのうちに響き伝えられる。入門式によって、はじめて「死」と直面する。つまりそれは生きる意味をつかむことでもあるのだ。

この神秘的な人間の儀礼は、現代社会ではほとんど失われ、忘れられてしまった。D、イニシエーションがないということは人間存在にとって致命的に空しいのだ。だからだらっと、いわゆる「大人」の世界に流れ込んでしまう。今日の大人はほんとうの大人といえるのだろうか。生きるということが、どんなに鮮烈に痛くて、辛くて、きびしいものか、そして、それをのり超える。その実感が無い。考えもしない。若者は惰性的に上の学校に入り、やがてサラリーマンになり、女房持ちになり、親父になる。その実感がない。考えもしない。若者は惰性的に上の学校に入り、やがてサラリーマンになり、女房持ちになり、親父になる。行って行く。せいぜいその間、入試などというまったくナンセンスな、記憶力とマナーだけの試練をくぐる。わずかに学校の運動部でシゴキ、シゴかれる。あのいささか異常な鍛え方は入門式の反映だったのかもしれない。しかしその程度のものさえ、最近のニュースでは新入生がみんなソツポを向いて、ほとんど入部しないという。

いずれにしても年長者に対する尊敬は失われ、既成の制度、モラルの絶対感は崩れ去っている。だが若者は意識下で、自分自身にイニシエーションを課し求めているのではないか。私は激烈な学生運動に身を投じ、わが身を傷めている若者たちを見てみると、まったく変形したイニシエーションのような気がしてならない。ヘルメットをかぶり、タオルを顔に巻く。あれもマスクだが。その行動はほとんど無目的であり、滅茶苦茶な破壊衝動のようにも見える。大人はそのことに腹を立て、軽蔑もするが、恐れをも抱く。

(中略)

人間が昔から行ってきたシステムが無効になった現代、若者は年長者の助けをかりずに、自分が人間となるための人生の扉を、自分の力で、孤独に、ひらいて行かなければならない。

だが、私はさらに突っ込んで考えてみたい。このことはある意味では、根源の昔からそうだったのでないか。そう思うからだ。大人社会が制度としてイニシエーションを行った。勿論<sup>もちろん</sup>そうではある。しかしその逆の側、若者の方がイニシエーションをもとめ、積極的にそれを己れに課したと考えるのもよいのではないか。

というのは、初めに言った幼い日のあの強烈な想い<sup>おも</sup>出が私にそれを暗示するのだ。天狗の面の子たちがイニシエーションとして私を襲ってきたのでは決してなかっただろう。また母親がなにも意識して黒髪<sup>くろかみ</sup>のうしろに自分を隠したわけでもないし、私の方を振り向かずにいたわけでもない。

たまたま薄暮に襲ってきた面、母親の蒼白<sup>そうはく</sup>な顔。それを自分の運命の出発点と感ずるのは、私自身なのである。人間が目ざめる頃に、己れと他の姿、その関係を決定する。生命の条件として、自ら望み、捉<sup>とら</sup>えると考えるのが本質ではないか。チャンス自体は誰にでもあるかもしれないが、つかまえない人間もいる。それをイニシエーション、象徴<sup>G</sup>的に、人生の筋としてつかみとった場合は、若者の方がそのポイントを積極的に逆どりしたと言<sup>い</sup>うべきである。

町にはたくさん子供がいるのに、大きい子たちがなぜ私ばかり追いかけるのか分らなかったが、今考えてみれば逆に私に触発されたときえ言えるかもしれない。彼ら自身も気づかずに、私の入門儀礼に引き寄せられ、参加した、そんな気がする。

一見、あまりに身に引きあてた自分勝手な解釈だと思われるかもしれないが、実は意外に一般的なのではないか。誰でも恐らく、いかにささやかであってもそういう経験をもっているに違いないのだ。たとえそれが忘却のうちに埋もれてしまっているとしても。

と考えるならば、文化人類学者<sup>H</sup>たちが言っていることはまるで逆なようである。とかく学者はあまりにも客観的に対象を観察しようとする。そのせいか、制度や儀式、外的条件だけにウエイトをおいて、個の実感、体験を抜きにしてしまう。困難かもしれないが、精神生活の内側から、さかさまにつかまえないなければならないことも確かなのだ。イニシエーションもしきたりとか上

からの儀式と、受身にばかり捉えるより、いま言ったように若者の生命力の充実したとき、自然に、自分自身に課する、生きがいの具体化であると考えたい。受ける側から、人生に対して挑む。高貴な戦慄、挑戦の激しさをもっている。またそういう若者こそを、人生に入門させなければいけない、という見えない仕組が人間社会の中に一つの必然として働いているのではないか。若者の求めて突き進む積極性と、大人たちの叡智えいちとが巧妙に力をあわせ、ハーモニーを作り出し、その土地土地、時代時代の条件に応じて多彩な儀式となって展開するのだ。

そこに突然、奇怪な姿で「面」が登場する。いったい、面の役割<sup>1</sup>は何なのだろうか。それらがもたらす異様な戦慄によって、人間を新しい生命の次元に引きあげるのか。或いはまた人間存在自体を引き裂くのか。この仮面の神秘。

まずここに問題をしばってみた。まことに人間というのは根源的に矛盾的存在なのである。自分と、自分を越えたものとを、いつも自分の内にもち、そしてその双方をしっかりとつかんでいなければ本当には生きられないのだ。引き裂かれた存在、その矛盾の意識は決して他の動物には見られない。そして、矛盾を克服するために、逆にさらに矛盾した様相で身をよそおい、一だんとそれを深める。仮面——。人間存在の矛盾律、その言いようのない二重性を克服するために仮面が存在していると思えない。

克服するために、それをさらに激しい矛盾の形でつきつける。それによって自分をのり超え、世界と合体するのだ。まことに人間の悲しいような、嬉しいような独特の運命を、マスクは影として、また実体として現出している。いま言ったとおり、人間が自分であると同時に自分を越えた別なものになる。人間自身が己れに自分を投影して、のり超えて行かなければならないという、そこにそもそも人間的な運命の根源がある。

仮面の「神秘」を現代人は解釈してさまざまに言う。それが原始社会においてタブーの存在になっているからだとか、儀式の際、演出によって、慣習的に、ただの無機物から突然、超自然の表情が付与されるとか。とかくそんな風に思われているようだが、そうではない。矛盾をキリキリと引裂きつきつける、戦慄的な二重性にこそ神秘が現出するのだ。

面をかぶって別のものになる。神、死霊しりょう、祖霊……いずれにしても人間を越えた、超自然的な存在に変身する。それは自分で

ありながら、同時に別個の存在であるということだ。たとえば怖<sup>おそ</sup>ろしいマスクをかぶって暗闇<sup>くらやみ</sup>の森からあらわれるとき、そのとき彼は祖霊そのものである。——ようだ。だがまたその瞬間に、変装している人は自分自身の存在の二重性を知っている訳だ。確かに自分でない自分になっている興奮、精神の高揚はある。しかし面はいつかは脱ぐんだし、彼はまたいつもの彼に戻るのだ。

J 面をかぶった者は、己<sup>おの</sup>れのつけている面の効果、面が他にはたらかかけている力、そのはねつかえりを逆に強く身にかけている。瞬間瞬間に一種の新鮮な衝動として。ふだんなら「やあ」と挨拶<sup>あいさつ</sup>する相手がショックを受け、おののき、怖れる。それも単なる遊びごとではなく、真剣な現実なのだ。

周囲の神秘的な高揚。それと自分との間に何か不思議な矛盾がはたらく。断絶と、それを超えて迫ってくる真剣な波動。そのふくれあがりがあるに違いない。仮面をつけた人間の存在はまことにコンプレックスである。

面をかぶるという行為、面をかぶった人間を考えてみると、ひどく孤独である。

(岡本太郎『美の呪力』新潮社 二〇〇四年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 空欄部 A、D、J に入る語句として最も適切なものの組み合わせを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

い。解答番号は 1。

- ① A…ところで D…だが J…しかし
- ② A…ところで D…よって J…さらに
- ③ A…ところで D…そして J…すなわち
- ④ A…ところが D…そして J…さらに
- ⑤ A…ところが D…よって J…しかし

問二 空欄部 B に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 2。

- ① 侮蔑と嘲笑
- ② 神秘と俗悪
- ③ 朝日と夕闇
- ④ 母親と子供
- ⑤ 苦悩と動揺

問三 傍線部C「現代はまことに『イニシエーション』を失った時代である」とあるが、イニシエーションを失う前の時代に社会で起こっていたこととして不適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 3。

- ① 死との直面。
- ② 両親との訣別。
- ③ 宇宙の還元。
- ④ 生きる意味の獲得。
- ⑤ 世界観の確立。

問四 傍線部E「ほんとうの大人」とあるが、筆者が考える「ほんとうの大人」とはどのようなものか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 4。

- ① 人間自身の儀礼によって宇宙に還元された人
- ② 生きるということに無自覚な人。
- ③ 職と家庭を持ち社会人として独立した人。
- ④ 学校の運動部できついシゴキを乗り越えた人。
- ⑤ 激しい学生運動に身を投じた人。



問五 傍線部F「まったく変形したイニシエーション」とはどのようなものであるか。空欄部を次の形式に従って三十字以内で記しなさい。ただし、「大人」「自分」「人間」という三語を必ず用いること。解答は **国語解答用紙**。

従来のイニシエーションとは異なり、**三十字以内** イニシエーション。

問六 傍線部G「象徴的」の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **5**。

- ① 記号的
- ② 抽象的
- ③ 空想的
- ④ 創造的
- ⑤ 印象的

問七 傍線部H「文化人類学者たちが言っていること」として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答

番号は 6。

- ① イニシエーションとは生きがいの具現化ではない。
- ② 制度や儀式、外的条件を重視すべきである。
- ③ イニシエーションとは社会が設定した制度である。
- ④ 精神生活の内側から対象を観察する必要がある。
- ⑤ 文化人類学では客観的に対象を観察する。

問八 傍線部I「面の役割」とあるが、本文中で著者の主張する面の役割として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び

なさい。解答番号は 7。

- ① 矛盾した様相へと人々をよそおわせること。
- ② 人間の持つ矛盾性を克服すること。
- ③ つけたものを、自身をこえた別のものへと変容させること。
- ④ 無機物に超自然の表情を付与すること。
- ⑤ つけたものを超自然的な存在へと変えてしまうこと。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 8 ～ 12。

1 農業にタズサわる職に就きたい。 8

- ① 採
- ② 操
- ③ 扱
- ④ 携
- ⑤ 挟

2 世界的なインフレによって経済がテイタイしている。 9

- ① 滞
- ② 帯
- ③ 隊
- ④ 袋
- ⑤ 戴

3 ユークリッド曰く、キカ学に王道なし。 10

- ① 帰
- ② 黄
- ③ 幾
- ④ 紀
- ⑤ 騎

4 過去の事例から問題の原因をルイスする。 11

- ① 衰
- ② 粹
- ③ 出
- ④ 帥
- ⑤ 推

5 景気が悪いときに資金をユウヅするのは難しい。 12

- ① 悠
- ② 有
- ③ 裕
- ④ 融
- ⑤ 郵

## II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「俗流キャリア教育」において、「やりたいこと（仕事）」のポジションは、きわめて高い。しかし、僕が腑ふに落ちないと思うことのもうひとつは、「やりたいこと（仕事）」なんて、そんな簡単に見つかるものなのか、「自己理解」を深めたからといって明確にできるものなのか、という点についての疑問である。実際、先のベネッセ教育研究開発センターの調査では、高校生であっても、その半数は「なりたい職業」が「ない」と答えている。

子どもや若者には、いまだ働いた経験がない。高校生であれば、アルバイトくらいはしているかもしれない。しかし、アルバイト経験の範囲は、サービス業での接客や販売など、非常に限られたものである。昔のように家業を手伝ったり、昼間はフルタイムで働いて、夜間に定時制高校に通ったりするような生徒は、今や圧倒的に少数派である。大学生を見回してみても、事情は変わらない。アルバイト経験に、せいぜい家庭教師や塾講師が加わるくらいのものではないか。

そんな子どもや若者が、「やりたいこと（仕事）」を見つけるとは、いったいどういうことなのだろう。これまでの経験で接したことのある職業人に影響されて、ということもあるだろうが、それも、学校の先生や病院の看護師といった、かなり狭い範囲での「経験」に限られてしまわないか。そうでなければ、メディアを通じて得た「情報」に飛びつくということであろう。

A、子どもや若者は、「絶対的な意味で」職業（仕事）をよく知らないのである。試みにゼミの学生などに親の仕事について聞いてみても、学生たちの対応はしどろもどろ。会社名は言えたとしても、具体的な仕事内容を言える者はほとんどいない。それでも、キャリア教育に促されて、「やりたいこと（仕事）」を見つけようとすれば、それは、イメージ先行型の「憧れあやぶ」に近いものになるか、「出会い頭」に近い選択になってしまふのではなからうか。専門学校が得意とするような、きらびやかなタカナ職業に高校生の人気が集まったりするのは、こうした事情を抜きにしては理解できないことのように思う。

結局、僕が言いたいのは、大学生も含めて子どもたちに「やりたいこと（仕事）」を見つけさせたとしても、その選択の根拠は、ずいぶんと「底の浅い」ものになる可能性が強いということである。

そんなことをするくらいであれば、子どもや若者には、現在の日本の産業構造がどうなっていて、職業構成がどう変化し、実際の職場における労働（仕事）の実態が、いかなる状況にあるのかといった、職業や仕事についての理解を深める学習に力を入れることを薦めたい。もちろん、そこには、グローバル化した経済環境のもとでの日本経済のポジションについての理解なども入ってくる。

要は、イメージ先行やメディアの情報を鵜呑みにして獲得したのかもしれない「仕事」像をいったんは崩したうえで、多様な選択肢の存在に気づく必要がある。「やりたいこと」を考えたいのであれば、そうした広い意味での「社会認識」に基づく豊かな「土壌」を先に形成してほしいということである。

個人的な提案ではあるが、流行りのキャリア教育が、「やりたいこと（仕事）」の選択↓その職業（仕事）について調べ学習といったベクトルでの段階論に立っているとしたら、そんなことはすぐにもやめたほうがいい。そうではなくて、「やりたいこと」探すと、さまざまな職業（仕事）調べとは、同時並行的に、相互に影響を及ぼしあうように取り組まれるべきであろう。

職業（仕事）についてのいろいろな選択肢を知り、そのどれかに興味を持つ。そうしたら、その職業（仕事）について深く調べてみる。その結果、違うなと思ったら、また別の選択肢について興味を寄せてみる。そうしたら、今度はその職業（仕事）について……。求められるのは、こうした学習の繰り返しであり、「自己理解」と「職業理解」との往復関係をつくりあげることである。

結果として、在学中に「やりたいこと（仕事）」が決まらなくても構わない。「専門職（専門的職種）」に就きたいのであれば、ある時点で決めておく必要があるかもしれないが（――それだって本当は新卒時点ではなく、途中からの参入も可能なのだが）、それ以外の若者にとっては、困ることなんてない。むしろ、決めていなくても、いろいろな選択肢（仕事）について理解していることのほうが決定的に重要である。

（中略）

そういう意味で、「自己理解」と「職業理解」との往復的な学習の結果見えてくる、子どもや若者の「やりたいこと」は、必ず

しも特定の職業や仕事という次元に落とし込まれる必要はない。

技術系なのか、事務系なのか、広い意味での対人サービスなのかといった「方向感覚」と、自分が働いていくうえで何を大切にしたいのか、何をやりとげたいのかといった「価値観」が、大まかにつかめれば十分である。

もちろん、実際に働いてみる前にすべてがわかるはずはないのだから、そうした「方向感覚」や「価値観」は、その後変化してもよい。年齢が低い時期には、大きく変化するかもしれない。しかし、それでも高校生や大学生くらいになれば、そうした変化は、ある程度の「幅」に収まるようになるだろう。そうしたべれない「軸」をつくること、根っこにある自分の「軸」をつかむことが重要なのである。

若い人のなかには、具体的な職業や仕事という次元で、自らの「やりたいこと」を見つける人もいるかもしれない。それが、場当たりのな「決め打ち」ではなく、自己理解と職業（仕事）理解との豊かな往復関係をもった学びの成果であるならば、それはそれで大いに尊重すべきである。そうした形で「やりたいこと」を見つけることが、その後の学習や行動へのモチベーションを高め、本人の努力や成長を促すであろうことは言うまでもない。

ただ、そうした場合でも、彼または彼女が「なぜ、その職業（仕事）をやりたいと思うのか」の根っこに存在するもの、人を支援したいとか、コツコツと物事を地道にやり遂げることによる満足感を感じるとか、といったより深いレベルでの「価値観」については、十分に意識化しておいたほうがよい。これは、先に述べた自分の「軸」とも重なる。

「軸」をもって特定の職業（仕事）をめざすのであれば、たとえその職業（仕事）に就くことができなくても、困ってしまうようなことにはならない。大切なのは、職業（仕事）それじたいではなくて、自分の「軸」に基づく価値観を実現することであると気づけるはずだからである。そして、そこに気づけば、職業（仕事）の選択肢は、他にも現れてくる。

（中略）

さらに、僕がいま流行りのキャリア教育に違和感を持ってしまう点として、それが「やりたいこと」探しには熱心なのに、その「やりたいこと」が実現可能かどうかについての探求（判断）は、基本的に個人に任されている（ように思われる）というこ

とがある。

これは、もちろん「微妙」な問題を含んではいる。「おまえは、「夢」を持った生徒や学生に対して、その将来の「可能性」を最初から見限っておけとでも言うのか」といった非難の声が飛んできそうでもある。

なかなか悩ましい。しかし、こんな話もある。数年前に聞いた、学区内では中堅より下の「課題集中校」とでも呼ぶべき高校に勤務する先生の話だ。

その高校では、その時点で高三になった生徒たちが一年生の時から、キャリア教育に熱心に取り組んできた。その結果、生徒たちは「夢」や「やりたいこと」を語るようになり、学習や学校行事などへの意欲も見せるようになったという。しかし、高三の夏、いざ蓋を開けてみると、就職希望者に対する求人数は激減し、空前の就職難の状況にあった。

先生たちにできることは、生徒の夢も希望も斟酌しんしゃくせず、とにかく学校に来ている求人<sup>E</sup>に生徒たちを押し込んでいくだけ。それでも決まらない生徒が多数残る。いや、自分の希望を優先して、学校幹旋あつせんの就職ルートには乗ろうとしない生徒もいた。

「結局、彼らは、夢追い型のフリーターになっていくしかないのでしょうか」

話を聞いていて、胸が痛くなった。と同時に、僕は「キャリア教育って、結局、何だったんでしょね」と、その先生から問い詰められているような気がした。

この高校の先生の話は、キャリア教育のあり方を考える際の核心的な問題を突いている。「俗流キャリア教育」に対する痛烈な「疑問」でもあるだろう。

悩ましいところではあるのだけれど、結論的に言ってしまうおう。

僕は、キャリア教育には、生徒に「夢」や「やりたいこと」を見つめさせ、目標に向けた努力を促すという役割と、生徒の希望と「現実」との「折り合い」をつけさせる役割という、二重の役割があると考えている。いわば、生徒の希望や向上心を、炊きつける（加熱する）「役割と、それを適切に「冷却して」「現実」に着地させる役割である。

なんと「冷酷Fな」と思われるだろうか。

誰<sup>だれ</sup>だって「加熱」の役割は喜んで引き受けるが、「冷却」の役割はそうではない。嫌われ者にはなりたくないから。しかし、それでいいのだろうか。

これが進学指導の場面であつたら、目の前には「入試」という現実があるので、校内試験の成績や予備校の模擬試験の結果といった「客観」的な基準に照らしながら、教師は、生徒の志望を「現実」に着地させる指導にも取り組むだろう。そこにはなんら「後ろめたい」感覚はない。しかも、現在の入試は、基本的には「売り手市場」の状態にある。

G、これが生徒の「将来」の希望にかかわるキャリア教育の場面となると、様相が変わってくる。状況は「買い手市場」である。にもかかわらず、ことは「将来」のことであるし、客観的な判断基準なども存在しない。いきおい、生徒の希望や「やりたいこと」が最優先されていくのではないか。

「やりたいこと」最優先のキャリア教育で、本当に大丈夫なのか。

そもそも、生徒の「やりたいこと」の選び取り方に問題があるかもしれないという点は、すでに述べた。そこがクリアできていたとしても、将来、やりたい仕事にはつけないかもしれない。その「リスク」についてきちんと気づかせ、そうした事態への対処方略についても考えさせておくことが、本来の教育ではないだろうか。

先に論じたように、職業や仕事の次元での希望よりも、もつと根っこにある「価値観」や自分の「軸」を明確にしておいた方が、いざという時には「切り替え」もできる。そうした働きかけや取り組みを強めていくことが、非常に大切であろう。

そのうえで、ここでは、もうひとつ別の提案をしておきたい。

(中略) 若い人たちには、日頃から「やりたいこと」だけに注目するのではなく、自分の「やれること」、現在の社会のなかで「やるべきこと」を意識してほしい。「やれること」は、言うまでもなく個人の能力や適性の問題である。では、「やるべきこと」とは何だろうか。

人が仕事をすると、個人が好きなことをして、自己実現をめざすという側面だけで成り立っているわけではない。仕事には、社会的分業のなかでどこかの「役割」を引き受けるという側面がある。



H、就労はひとつの社会参加のルートなのである。社会全体の観点から見れば、さまざまな業界や業種、いくつもの種類の仕事が多業関係をつないでいるからこそ、この社会は円滑に動いている。ひとつの会社組織であれば、それぞれの部署がそれぞれの役割を引き受けているからこそ、会社が機能していく。

現在の社会において、何が「やるべきこと」なのか、どこに課題があるのかを考えることは、子どもや若者の職業（仕事）選択の際の視点となつてよい。若い人たちには、働くとは、自らの仕事を通じて社会に参加し、貢献することなのだという意識を強く持つてほしいと思う。

そして、現実問題としても、「やるべきこと」の周辺には、職（求人）は豊富に存在しているのが常である。

職業選択をする際、「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」という視点のバランスを考え、その三者が交わる場所で進路決定をすれば、その実現可能性は格段に高まるだろう、と僕は考えている。

しかし、「俗流キャリア教育」においては、どうなのか。「やりたいこと」の視点だけが「上滑り」しているように感じるのは、僕だけだろうか。

最後に、若い人たちに意識してほしいことをまとめておこう。

学校におけるキャリア教育では、「I」が重視されすぎているかもしれないと、一度は疑ってみよう。「I」を明確化することの意義は否定しないが、その前にやっておくべきことがある。

働くこと、産業、職業、労働の現実については、「これでもか」というくらい知っておいてよい。情報化が進んだ今日では、必要な情報へのアクセスにはさほど困らないはずである。さまざまな仕事をしているロールモデルと、情報媒体を通じて、あるいは直接的に出会うのもいい。そうした学習や経験と、自己を見つめる作業の往復のなかでこそ、現実味を持った「J」が見えてくる。しかも、それは「K」「L」とのバランスのなかでつかまれる。

また、「やりたいこと」は、必ずしも具体的な職業や仕事の次元に落とし込まれなくてもよい。

（児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』筑摩書房 二〇一三年より引用 問題作成の都合上一部変更）

問一 空欄部 A、G、H に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 13。

- ① A..それゆえに G..そのため H..それにもかかわらず
- ② A..要するに G..しかし H..それにもかかわらず
- ③ A..要するに G..しかし H..だからこそ
- ④ A..なぜならば G..だが H..その一方で
- ⑤ A..なぜならば G..そのため H..だからこそ

問二 傍線部 B 「子どもたちに『やりたいこと(仕事)』を見つけさせたとしても、その選択の根拠は、ずいぶんと『底の浅い』ものになる可能性が強い」とあるが、この理由として不適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。

解答番号は 14。

- ① 子どもが「やりたいこと(仕事)」に対して抱く「憧れ」は実現可能ではないものが多いから。
- ② 学校の先生や病院の看護師といった、これまでの自分の狭い「経験」に限られてしまうことが可能性があるから。
- ③ 仕事や社会について、限られた経験でしか理解しないままに「やりたいこと(仕事)」を見つけているから。
- ④ 多くの大学生や子どもは、いまだ十分に働いた経験がないから。
- ⑤ 専門学校が得意とするようなきらびやかなカタカナ職業に人気が集まるから。

問三 傍線部C『自己理解』と『職業理解』との往復関係の内容について、次の形式に従って五十字以内で記しなさい。ただし、「職業」「繰り返し返す」の二語を必ず用いること。解答は **国語解答用紙**。

**五十字以内**こと。

問四 傍線部D「子どもや若者の『やりたいこと』は、必ずしも特定の職業や仕事という次元に落とし込まれる必要はない」とあるが、この理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **15**。

- ① 技術系なのか、事務系なのか、広い意味での対人サービスなのかといった「方向感覚」はあまり重要ではないから。
- ② 自分の大事にする「価値観」はその後変化してもよいから。
- ③ 自らの「やりたいこと」はいかなる場合においても最も尊重すべきであるから。
- ④ 自分が職業に就く上で大切にしたいものを大まかにつかむことができればよいから。
- ⑤ いろいろな仕事について理解していれば「やりたいこと」はみえてくるから。

問五 傍線部E「キャリア教育のあり方を考える際の核心的な問題」とあるが、この記述の説明として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① キャリア教育では、子どもの「やりたいこと」が実現可能かどうかについての判断ができないということ。
- ② キャリア教育では、客観的な基準に照らしながら子どもの志望を「現実」に着地させる必要があるということ。
- ③ キャリア教育では、子どもに「やりたいこと」を見つけさせ目標に向けた努力を促さなければならないということ。
- ④ キャリア教育では、子どもを学校幹旋の就職ルートに乗せなければならないということ。
- ⑤ キャリア教育では、子どもの「やりたいこと」とその仕事につけないリスクについても考えさせる必要があるということ。

問六 傍線部F「冷酷」の対義語として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17。

- ① 柔和
- ② 篤実
- ③ 温順
- ④ 懐柔
- ⑤ 篤行

問七 空欄部 I、J、K、L に語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 18。

- ① I..やりたいこと J..やりたいこと K..やれること L..やるべきこと
- ② I..やりたいこと J..やるべきこと K..やりたいこと L..やるべきこと
- ③ I..やりたいこと J..やりたいこと K..やりたいこと L..やるべきこと
- ④ I..やれること J..やるべきこと K..やれること L..やるべきこと
- ⑤ I..やりたいこと J..やるべきこと K..やりたいこと L..やれること

問八 本文中の趣旨と合致する文章として適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 19。

- ① キャリア教育においては、職業や仕事の理解よりも「やりたいこと」を優先させるべきである。
- ② 自分が働く上で大切にしたい「価値観」は、自分の経験から培うべきである。
- ③ キャリア教育においては、将来の希望への実現可能性も考えさせなければならぬ。
- ④ 仕事に就くとは自己実現のためだけでなく、社会に貢献するためにも行うものである。
- ⑤ 「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」のどの視点を大事にするかを考えなければならない。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

20

〜

24

。

1 問題が複雑にならないようにチュウヨウの立場をとる。 20

- ① 養
- ② 庸
- ③ 溶
- ④ 曜
- ⑤ 踊

2 法律にテイシヨクする行為は許されない。 21

- ① 停
- ② 貞
- ③ 邸
- ④ 廷
- ⑤ 抵

3 高齢化によって医療費の増加にハクシヤがかかる。 22

- ① 舍
- ② 車
- ③ 謝
- ④ 射
- ⑤ 写

4 自分と自分以外というリヨウイキに分けて考える。 23

- ① 寮
- ② 漁
- ③ 涼
- ④ 獺
- ⑤ 領

5 現状をハアクした上で問題を解決する。 24

- ① 刃
- ② 覇
- ③ 把
- ④ 齒
- ⑤ 葉

	解答番号	解答欄					
I	1	①	②	③	④	⑤	5点
	2	①	②	③	④	⑤	5点
	3	①	②	③	④	⑤	5点
	4	①	②	③	④	⑤	5点
	5	①	②	③	④	⑤	5点
	6	①	②	③	④	⑤	5点
	7	①	②	③	④	⑤	5点
	8	①	②	③	④	⑤	2点
	9	①	②	③	④	⑤	2点
	10	①	②	③	④	⑤	2点
	11	①	②	③	④	⑤	2点
	12	①	②	③	④	⑤	2点

I問五 解答例

従来のイニシエーションとは異なり、

「人間となるために大人に設定されるのではなく自分で課す」 (二十六字) イニシエーション。

「人間となるために大人の力を借りずに自分で自身に課す」 (二十五字) イニシエーション。



	解答番号	解答欄					
II	13	①	②	③	④	⑤	5点
	14	①	②	③	④	⑤	5点
	15	①	②	③	④	⑤	5点
	16	①	②	③	④	⑤	5点
	17	①	②	③	④	⑤	5点
	18	①	②	③	④	⑤	5点
	19	①	②	③	④	⑤	5点
	20	①	②	③	④	⑤	2点
	21	①	②	③	④	⑤	2点
	22	①	②	③	④	⑤	2点
	23	①	②	③	④	⑤	2点
	24	①	②	③	④	⑤	2点

Ⅱ問3 解答例

・興味をもった職業について調べ、その結果違うと思ったら別の職業に興味を寄せ調べる、という学習を繰り返す（こと）  
五十字

・ある職業に興味を持ち深く調べ、違った場合は別の職業に興味を持ち調べる、という学習を繰り返す（こと） 四十五字